

1月上旬

農閑期の冬場に行う寒起こしと天地返し

寒起こしは、1～2月の厳寒期に行います。

有機物をたっぷり入れて、ざくざくと粗く耕し、塊のまま寒風にさらしておきます。寒さで病原菌や害虫が死滅する効果があります。

また、土中の水分が、凍結と乾燥を繰り返すことで、土の団粒化がすすみ、通気性のよい土になります。農閑期を利用して、春の作付けの前に必ず行いましょう。

さらに、一般的に、野菜を栽培するのは、深さ20～30cmまでの土です。

この部分を作土、その下の層を心土（有効土層）といいます。作土で繰り返し野菜を作っていると、連作障害が発生しやすくなります。対策として数年ごとに作土と心土を入れ替えます。これを天地返しといいます。

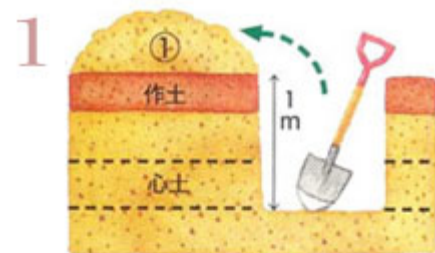
この天地返しも1～2月の厳寒期に行うのが健康な野菜を作るために必要です。

毎年、冬には寒起こしを行い、数年ごとに天地返しも行います。

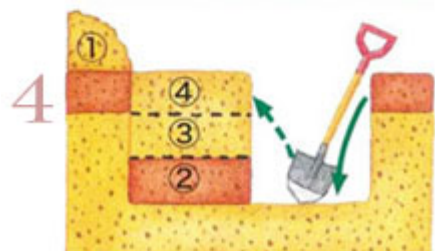
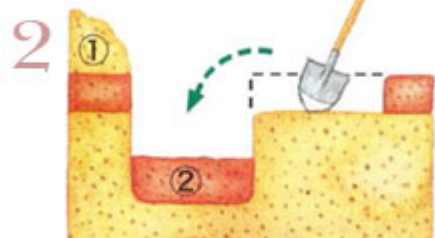
寒起こし



天地返し



深さ1mほどの穴を掘り、土をわきに積み上げておく(①)



この後右へ2～4を繰り返す

1月中旬

マルチのかけかた

土の乾燥を防ぎ、地温を高め、雑草が生えるのを抑えるなど、マルチをかけることにより効率的な野菜づくりができます。

マルチング（略してマルチ）とは、土の表面や株元をポリフィルムで覆うことを意味します。ここではマルチのかけかたを写真により説明します。

① 畝幅よりも広いマルチを用意する



畝幅よりも広いマルチを畝の端にのせます

② マルチのすそを固定する



マルチのすそを畝の端に埋めて、土を足で踏んでしっかりと固定します

③ マルチを伸ばす



マルチを畝よりも長く伸ばしてピンと張ります

④ マルチを切る



① 畝の端に埋めてしっかりと固定します ② くわで切ります

⑤ 畝の両サイドを固定する



① 足で踏んでマルチをピンと張り、くわで土をかけます



② 同じようにして少しずつ土をかけていき、両サイドを固定します

⑥ 重石をする

風が入らないように畝の中央に土をのせます



(野菜づくり、藤田智著より)

風の強い所については、マルチトンボなど市販のものを利用してマルチが飛ばないように押さえるのも一工夫です。

1月下旬

サヤエンドウは厳寒期の防寒対策と支柱立てが大切

晩秋にタネまきしたサヤエンドウは、ツルが少し伸び出した状態で越冬し(早まきしたものは、大きく育って寒害を受けやすい)厳寒期を迎えます。この頃の管理しだいによって成果はずいぶん違います。

エンドウは茎が細い割に葉が大きくなり、わき枝の伸びも盛んになるので、地面に這わせたままにしておくと、風に振り回され、折れたり育ちが悪くなったりします。

丈の低いササ竹や木の枝を、霜よけも兼ねて北側又は西側の株近くに添えてたて、防寒します。(特に風当たりに注意します)

2月に入ってツルが20cm位になると巻きひげが伸びてくるので、ササ竹を取り除き、畝の周りに支柱を立てて、茎をヒモで結んで誘引しツルを絡ませます。ところどころに稲ワラの下方に垂らして、巻きひげが絡みやすくなるのもよい。また、支柱の周りにネットを張ってツルを絡ませます。

2月になったら株元に化成肥料を施し、土寄せをします。

乾燥すると、うどんこ病や石灰欠亡が出やすいので注意しましょう。



畝の北側もしくは西側に、高さ約50cm程度のササ竹を立てます

① 畝の周りに支柱を立ててひもを張ります



② 地際に伸びているつるを上へ伸ばし、ひもで軽く結びます



③ つるの伸び具合に合わせて、上段のひもに結びつけていきます